

6 防除対策推進上の問題点及びその対策

農作物名	病害虫名	問題点	対策
水稲	トビウモンカ	<ul style="list-style-type: none"> ・8月上中旬の防除はコブノメイガとの同時防除のため適期防除ができなかった圃場があった。 ・無人ヘリ防除では散布作業期間が長く必ずしも適期に散布ができなかった。 ・圃場の見回り不徹底による防除の手遅れや基幹防除の省略 ・イミダクロブリド剤に対する感受性低下 	<ul style="list-style-type: none"> ・的確な発生状況の把握と必要に応じた防除 ・株元に十分付着するような薬剤が必要 ・主要防除薬剤に対する薬剤感受性の把握
	コブノメイガ	<ul style="list-style-type: none"> ・6月上旬移植の圃場では箱施薬剤の残効切れで第1世代幼虫の食害が多くなった。また、箱施薬剤の散布量不足や散布ムラによる薬剤の効果不足も生じた。 ・第1世代成虫の発生期間が長く1回の防除では不足する圃場があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・箱施薬剤の的確な使用と移植時期の適正化
	縞葉枯病とヒメトビウモンカ	<ul style="list-style-type: none"> ・平成16年以降ヒメトビウモンカの保毒虫率が高く、縞葉枯病も多発傾向で推移している。 ・5月下旬～6月上旬に移植される地域での発生が多く、発生株率が30～40%の圃場も認められた。 ・発病株の抜き取り不徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウイルス保毒虫率の把握 ・主要薬剤に対する薬剤感受性の把握 ・発病株の抜き取り徹底 ・冬季～春季の耕起の徹底 ・越冬個体群の保毒虫率だけでなく、飛来虫の保毒虫率の調査とその結果に応じた防除対策の実施。
かんきつ	かいはよう病	<ul style="list-style-type: none"> ・越冬病斑の発生が多かった(発病葉率1.2%、平年0.4%)。 ・春葉で4月下旬に平年より早く発生を認め、その後、多い発生で推移した。 ・果実では例年にはほとんど発生を認めない極早生温州でも発生を認めた。 ・ストレプトマイシン剤のかんきつ登録が失効し、果実着生時に薬害の問題がなく、防除効果が高い薬剤がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発芽期以降の防除の徹底 ・防除効果が高い薬剤散布体系の確立 ・防風樹の整備や発病枝葉のせん除など耕種防除の徹底
	チャノキイロアザミウマ	<ul style="list-style-type: none"> ・発生が多く、防除情報等を発表した、第7世代(9月上旬)の防除が不十分で、極早生温州の収穫間際、場合によっては収穫期間中にも薬剤を散布しなければならない状況になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第7世代(9月上旬)の防除の参考となりうる発生予察体制の確立
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	<ul style="list-style-type: none"> ・臨機防除が実施されたが被害がやや目立った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感受性検定結果等に基づく、防除薬剤の選択
イチゴ	炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> ・親株の潜在感染株簡易検定では、感染株を有する農家の割合が21.8%と高かった。 ・生産者段階で汚斑状斑点の区別がつかず、廃棄処分の判断が難しい。 ・アゾキシストロビン剤に対する耐性菌を確認した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝染環を遮断するため、無病親株生産システムの確立 ・生産者や指導機関に対する育苗期の病徴判別のさらなる徹底 ・ジエトフェンカルブ剤耐性菌の発生の有無を調査 ・新規有効薬剤の登録
トマト、ミニトマト	黄化葉巻病	<ul style="list-style-type: none"> ・高温期に定植されるミニトマトなど、一部で媒介虫の侵入防止対策が不十分な圃場が見受けられる。 ・媒介虫、特にタバココナジラミパイオタイプQに効果の高い薬剤が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏～秋における媒介虫の発生量や保毒率調査など、予察技術の確立 ・目合いの細かいネットで被覆した場合の栽培技術確立(特に昇温抑制対策)。

農作物名	病害虫名	問題点	対策
施設野菜	タバココナジラミ(バイオタイプQ)	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の有効薬剤に偏重した防除が行われており、感受性低下が懸念される。 ・トマトでは、TYLCV 対策として防虫ネット主体の侵入防止技術が普及し一定の効果が得られているが、作型によっては他品目では、施設内の昇温を嫌って侵入防止技術が普及しにくい。 ・これまで発生が少なかったアスパラガスで多発生し、有効薬剤が少ない。一部ではすす病が全面に発生し、草勢が衰えて収穫が無くなる激しい被害を生じた。中刈りや全刈りを行った圃場もあり、次年度の収量への影響も懸念される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・有効薬剤に対する感受性のモニタリング ・各作物における薬剤防除、耕種的防除、物理的防除を組み合わせた総合的な防除技術の実証
レタス、ばれいしよ	オオタバコガ	<ul style="list-style-type: none"> ・発生量の急激な増加で、防除に遅れを生じた ・秋冬の露地野菜植え付け時より多い状況が続き、一部品目では有効薬剤が不足した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防除適期についての情報提供の検討 ・新規有効薬剤の登録